

文献紹介

川村博忠 著：

『国絵図』（日本歴史叢書44）

吉川弘文館 1990年12月

四六判 251ページ 2,700円

さきに著者は、学位論文の研究成果を『江戸幕府撰国絵図の研究』の書名で古今書院から発行した（1984年）。同書は原史料を駆使した専門書であり、評者も熟読し地図に関する小論にも紹介しており、著者の学恩に感謝している。

本書は、国絵図研究の第一人者である著者が一般読者向けの啓蒙書として書きおろしたものであり、これからの研究者の必読書でもある。史学・地理学・地図学・測量学・書誌学など、幕府撰（官撰）国絵図に対する発表は僅少であるから、本書は、役立つ面が多い。

本書の構成は、ほぼ下記のようなものである。

第一 官撰地図の歩み

1. 中国の官撰地図
2. 日本の官撰地図
3. 江戸幕府の国絵図とは

第二 慶長国絵図

1. 国絵図事業の概要
2. 国絵図作成の基準
3. 現存慶長国絵図の概観
4. 絵図様式および内容の特徴
5. 石高記載のない国絵図の現存

第三 元和・寛永期の国絵図

1. 領知異動に伴う個別的徴収
2. 寛永巡見使の国絵図上納
3. 寛永15年の国絵図

第四 正保国絵図

1. 国絵図事業の概要
2. 国絵図担当者の割当
3. 幕府の示した絵図基準
4. 国絵図調進の経過
5. 添献上物の種類
6. 明暦大火被災と国絵図再徴収
7. 正保国絵図の現存状況
8. 正保国絵図の様式・内容

第五 元禄国絵図

1. 国絵図改訂の幕府命令
2. 改訂の絵図基準

3. 新国絵図の特徴

4. 別途提出物の種類

第六 天保国絵図

1. 国絵図事業の概要
2. 郷帳改訂の通達
3. 諸藩の対応と天保郷帳の成立
4. 天保郷帳石高の内容
5. 国絵図改訂
6. 天保国絵図の様式・内容

第七 日本総図

1. 寛永日本図
2. 正保日本図
3. 元禄日本図
4. 享保日本図

参考文献——国絵図・郷帳一般11点、慶長国絵図関係3点、寛永国絵図関係3点、正保国絵図関係7点、元禄国絵図関係8点、天保国絵図関係6点、日本総図関係6点

上記の第一から第七までの内容を、私見を交えてその概略を述べてみよう。

まず評者が読んだ白文の『中国地理学史』（王庸、台湾商務印書館）には、軍事上・行政上から「図」の付く呼称が多く、漢籍にも「～之図」がみられる。わが国も測繪・絵図・広輿図・輿地図・鳥瞰図・図繪・図志・全図・万国図などの呼称が江戸時代に多く用いられた。江戸期発行の国図（ある国の「くにのず」）・国全図・細見図・絵図細見・名所細見之図・大絵図・絵図（写本も含む）などは、官撰国絵図の下絵図の影響がみられる。

第一の「官撰地図の歩み」では、中国の官撰地図の発達に伴う朝鮮や日本の官撰地図事業の興隆、大化の改新による国々の地図の献進、のちの官撰史書や地誌・国郡図作成、江戸幕府の国絵図事業に基づく4回の国絵図作成、土地台帳としての郷帳の上納の経緯、などについてまとめられている。

国絵図の縮尺は6寸1里（18、18cmが3.927 km）と定め、曲道は1里を3～4寸に縮めているとあるが、他の地図書も含めて「縮尺（路程を基準）何万分の一」と表現するほうが理解しやすい。また「縮尺（江戸期は縮図）」の表現がよい。

村々は郡ごとに色別され、村形は円形・楕円形・

短冊形の長方形で、郡ごとの石高が集計されている。

慶長国絵図は、幕府開設による国絵図と郷帳の徴収が、諸大名の統制と生産力の実態把握と租税に緊要であった。幕府提出の正図は現存せず、その控図・写図がいくつか現存し、それらを検討して様式・内容を考察している。村名と村高・郡ごとの石高・田畠・員数・村数の集計が記されている。

元和・寛永期の国絵図は、必要に応じて個別的に徴収したものである。

正保国絵図は、絵図様式の統一により日本の地図作成史上、画期的な意義をもつ。原本は現存せず、江戸期の模写図は全国の大半が国立公文書館内閣文庫に伝存しているが、破損のおそれがあるので閲覧禁止になっている。評者は現在地へ移転前の皇居内の同文庫で常陸国絵図を閲覧したが、約8畳敷の広さで鮮やかな彩色に目をみはった。

関係の諸書に、伊能忠敬の実測図も含めて路程(道法)は歩測であることを注記したい。この歩測の資料は不明であるが、何人かの歩測を集計し平均を取ったと評者は判断する。

一里山記号は36町を1里に定めて道筋の両側に黒星の記号が1里ごとに示され、距離を知る目安であり、縮尺目盛りでもあった。

正保国絵図収納のあと約50年後の元禄年間に、改訂の元禄国絵図を「新国絵図」と呼び、既存の正保国絵図は「古国絵図」と呼ぶようになった。

元禄国絵図は、1697年2月～1702年12月に全国の国絵図が収納された。全国83鋪のうち5か国分8鋪が国立公文書館内閣文庫に現存する。しかし国許に控が保管され、控図は全国各地に伝存している(評者がみた忠敬堂古地図目録に、国絵図を縮小した～国絵図・～国図・～国～郡之図・～州～郡地理之図・～国全図・～州大絵図などの名称があり、官撰国絵図の控図や写しを縮図して編集した民間人の絵図である)。

国絵図改訂の作成要領は130～132頁に示されているが、一部に解説誤記があり、評者の訂正の例を記しておく。国絵図仕立様之覚の4項の末文のうち、「墨引き申さるべきこと」は、「墨筋引き申さるべく候」、5項の末尾「申さるべきこと」は、「申さるべく候」、最後の10項の「但し古絵図にこれ有る寺社」のうち、寺社は「寺地」である。

天保国絵図は1831年12月に郷帳の改訂から始まり、34年12月に全国の改訂が終了した。次いで1835年6

月から国絵図改訂作業に着手し、38年12月までに全国の国絵図改訂が終了する。郷帳85冊、国絵図83鋪で、前者は全部現存し、後者は119鋪現存し、国立公文書館内閣文庫に所蔵され、一括して国の重要文化財に指定された。

なお元禄～天保郷帳の石高増加率については171～172頁に表があり、比較対照に便利である。例えば、常陸国図の石高・郡数の増減も判断できる。

日本総図は、国絵図に基づいて集成された。寛永日本図は、1638年6月に「日本国中之惣絵図」(日本総図)作成のため関係諸国へ国絵図提出を要請した。縮尺は約5分1里で国々は黒線で区画され、山地・河川・湖沼・城下は□印、主なる村は○印で地名記入、街道と船路は朱線、城主名と知行高記入の付箋がある。

正保日本図は、1644～1648年頃に提出の国絵図に基づき日本総図を編集し、縮尺は3分1里であった。

元禄日本図は、1701年7月頃に編集着手、絵図小屋で作業し、翌年12月に「日本御絵図」3枚が完成した。縮尺は4分1里である。本図は正保図より図形はゆがみ、退歩している(224頁に図形の変遷略図がある)。

享保日本図は、8代将軍吉宗が幕府文庫収納の国絵図や日本総図の閲覧をし、書物奉行に下問するなど関心が強かった。本図は元禄日本図に基づき編集しなおし、測量術として遠望術・交会法の新しい方法が導入された。縮尺は6分1里で、1717～1728年に完成した。

239頁の享保日本図の写真版は赤水日本図と類似点が見られるが、資料などは不明である。長久保赤水(1717～1801)は水戸藩出仕まで農業に従事し、その余暇20年をかけて『改正日本輿地路程全国』を完成した(1774年)。同図は経緯線を記し、緯度は渋川春海の緯度測定値を用い、経線には度数はない。発行は5年後の1779年で、のち数回発行し明治初年に至った。縮図は1寸10里と凡例にあるから、逆算して1分1里の路程を基準にした、前例がない均整の日本図である。

著者は、本格的な実測日本図は、幕府天文方の絵図事業として実施されて1821(文政4)年に完成した伊能忠敬(1745～1818)の「大日本沿海輿地全図」を待たなければならなかった、と述べて本文を終了している。学際的な必読書である。

(長久保光明)